

高等学校

平成 7 年 度

教育研究員研究報告書

地理歴史

東京都教育委員会

平成7年度

教育研究員（高校・地理歴史）名簿

科 目	所 属	氏 名
日 本 史	都 立 国 際 高 校	金 田 喜 明
	都 立 淵 江 高 校	石 黒 保 憲
	都 立 篠 崎 高 校	近 藤 明 夫
	都 立 八 王 子 北 高 校	糸 井 一 郎
	都 立 多 摩 高 校	宮 部 精 一
	都 立 小 金 井 北 高 校	石 戸 敏 弘
	都 立 清 瀬 高 校	外 山 至 生
世 界 史	都 立 広 尾 高 校	浦 部 利 明
	都 立 向 丘 高 校	佐 々 木 巧
	都 立 高 島 高 校	佐 野 誠
	都 立 多 摩 工 業 高 校	戸 谷 由 弥 子
	都 立 清 瀬 東 高 校	小 板 橋 又 久
地 理	都 立 小 山 台 高 校	井 川 一 実
	都 立 両 国 高 校	榎 本 康 司
	都 立 秋 川 高 校	羽 生 英 雄

担当 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課 指導主事 上 原 徹

目 次

主題設定の理由と研究の経過	1
I 近代におけるアジアとの国際関係と民間交流	3
1 幕末から明治期における日本人のアジア観	3
2 明治後期～大正初期の日中民間交流にみる日本観と中国観	4
3 朝鮮半島からの労働者の移住と日本社会	6
4 国際法からみた日中開戦について	7
5 日本軍政下のシンガポールにおける民間交流	8
6 朝鮮半島の人々との交流に貢献した日本人	10
II 現代の国際的課題と歴史的背景	11
1 資本主義形成期における貧困	11
2 フィリピンの独立運動と経済的困窮	13
3 フィリピン革命にみられる国民国家観	14
4 フィリピンの都市問題とその背景	16
III 日本における文化受容 — 身近な素材を通して —	17
1 花と日本人	18
2 飲茶の習慣を通して見た日本と新疆ウイグル自治区	19
3 豊臣秀吉の朝鮮出兵とやきもの	20
4 「なれずし」の伝播と「握りずし」の誕生	21
5 日本における西洋スポーツの受容	23

主題設定の理由と研究の経過

今日の国際社会は、冷戦構造の崩壊、経済のグローバル化などにより相互依存を一層深め、一方では、地域紛争、民族対立、南北格差などの諸問題を抱え複雑に変化している。こうした現代の国際社会のなかで、国際協調の精神に基づき、相互理解や協力、人や文化の交流を推進していくことは、経済的に大きな影響力を持つ日本にとって、今後ますます重要な課題である。

そこで本部会では、平和な国際社会の実現を目指し、歴史に学びつつ、現代の国際社会の課題を的確に把握するとともに、異文化に対して寛容な心をもつ生徒の育成を目指し、「近代におけるアジアとの国際関係と民間交流」「現代の国際的課題と歴史的背景」「日本における文化受容」の三つの視点から研究主題に取り組むことにした。

I 近代におけるアジアとの国際関係と民間交流

明治維新以降の日本の近代化は、日本を欧米諸国と同等の地位へ引き上げようとするものであったが、アジア近隣諸国に対しては、欧米諸国と同様、権益の拡大の対象として強圧的な姿勢をとる結果となった。また、日中・太平洋戦争などでは、アジアなどの人々に対して多大の惨禍をもたらした。このことは、今日もアジア近隣諸国などから問題にされることが多い。一方、アジア近隣諸国との政治・経済・文化の交流は一層活発になり、真の友好に基づく国際関係を築くことが強く求められている。そこで、このグループでは、過去の歴史的事実に対する認識を深めるとともに、アジア近隣諸国との友好に努力した人物の姿に注目し、平和で民主的な国際社会の実現に貢献できる生徒を育成する授業展開の工夫を試みた。

II 現代の国際的課題とその歴史的背景

19世紀以降、近代世界システムの世界各地への浸透は、アジアを世界資本主義体制に組み込んでいった。その結果、アジアでは既存の伝統的社会が変質し、貧困や民族対立などをはじめとする、現代の国際社会が抱える構造的課題がみられるようになった。そこでこのグループでは、現代の国際社会が抱える課題の歴史的背景などに着目し、「フィリピンの独立運動と経済的困窮」「フィリピン革命にみられる国民国家観」「資本主義形成期における貧困」「フィリピンの都市問題とその背景」の四つのテーマを通して、国際的課題の本質を構造的に把握させるとともに、主体的にその解決に取り組もうとする態度と能力を育成する授業展開の工夫を試みた。

III 日本における文化受容 — 身近な素材を通して —

人の国際化が進展する日本において、望ましい国際交流の推進を図るためには、異文化に対して偏見や差別感を抱くことなく、全ての文化が価値をもつことを認識できる生徒を育成することが必要である。そのためには、日本の文化を世界的な視野から多面的に見直すとともに、日本の文化が世界の諸地域の文化の影響を受けて形成されてきたことを理解することが大切である。そこでこのグループでは、「花と日本人」「飲茶の習慣を通してみた日本と新疆ウイグル自治区」「豊臣秀吉の朝鮮出兵とやきもの」「『なれずし』の伝播と『握りずし』の誕生」「日本における西洋スポーツの受容」の五つのテーマを取り上げ、日本の基層文化の重層性についての理解を深めさせる授業展開の工夫を試みた。

I 近代におけるアジアとの国際関係と民間交流

1. 幕末から明治期における日本人のアジア観

(1) 教材として取り上げた理由 明治期、日本と近隣アジア諸国との国際関係は大きく変化した。また、その背景には、日本人のアジア観の変化が存在した。鎖国下の江戸時代、朝鮮通信使は現在の国賓同様の扱いを受け、対等の国家意識が存在した。しかし、欧米列強のアジア進出は、日本人のアジア観の転機となり、また、明治期の脱亜入欧の思想や近代化の進展は、朝鮮半島などアジアに対する優越感情などを醸成させ、日本人のアジア観を変化させた。そこで、幕末から明治にかけての日本人のアジア観の変化を、岩倉遣外使節団とこの一員としてフランスに留学した中江兆民とのアジア観の違いを通して理解させ、現代の国際社会の基本理念である主権国家間の対等と平等について認識を深めさせることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は、3時間構成の第2時限にあたる。第1時限では、文禄・慶長の役から幕末までの日本と朝鮮半島との関係を理解させる。本時では、「特命全権大使米欧回覧実記」及び中江兆民の著述を取り上げ、岩倉遣外使節団の歴史的背景や意義を理解させるとともに、留学生としてこれに参加し、後に明治政府の外交方針を批判した中江兆民の考え方を考察させる。第3時限では、福沢諭吉をはじめとする明治初期の欧米思想の紹介者たちについて学習させる。学習指導要領では、「日本史A」の「(4)近代日本の形成と展開」の「ア 欧米文化の導入と明治維新」、「日本史B」の「(5)近代日本の形成とアジア」の「ア 欧米文化の導入と明治維新」で扱う。

(3) 展 開 例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・前時の復習 など	○江戸時代から明治期の日本と朝鮮半島など近隣アジア諸国との関係の変化を概観する。	・年表 ・絵「通信使の行列」
展	・岩倉遣外使節団 ・使節団の足どり ・使節団のアジア観	○岩倉遣外使節団が欧米に派遣された歴史的意義や背景を理解する。 ○使節団の足どりを地図を利用して知り、また、その記録である「特命全権大使米欧回覧実記」を通して使節団が欧米で見聞したことやエピソードなどを知る。 ○使節団が帰国する途中、アジアの植民地の実態を見て、日本の近代化をすすめアジアの後進性から脱け出そうと感じたことを理解する。	・絵「岩倉大使欧米派遣」 ・資料地図「使節団の足どり」 ・資料「米欧回覧実記」 ・資料「米欧回覧実記」

開	<ul style="list-style-type: none"> ・留学中の中江兆民 ・中江兆民のアジア観の形成 	<ul style="list-style-type: none"> ○パリの映像を見ながら、中江兆民の留学中の生活の様子や行動を理解する。 ○中江兆民が独自の外交論を展開したことを理解する。 ○中江兆民は留学中、当時のパリの庶民層の人たちとの交流などを大切にし、岩倉使節団とは異なった国際感覚を身につけたことを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・VTR「パリ右岸」 ・資料「論外交」「自由新聞」
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 福沢諭吉と中江兆民 	<ul style="list-style-type: none"> ○明治18年に福沢諭吉の脱亜論が発表されたことにより、脱亜入欧の考え方が多くの人たちに影響を与えたことを理解する。 ○中江兆民の思想など、脱亜入欧の考えに対する批判があったことを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料「脱亜論」

(4) 評価の観点 ①明治期の日本と近隣アジア諸国との外交関係の変化の背景には、日本人のアジア観の変化があったことを理解できたか。②岩倉遣外使節団が果たした役割や意義が理解できたか。③留学生として岩倉遣外使節団に参加した中江兆民が、使節団とは異なったアジア観を形成した背景を理解できたか。

(5) 指導上の留意点 ①写真・VTRなどの視聴覚教材を効果的に活用することにより、実感的に理解できるよう配慮する。②明治期初期の日本への欧米思想の紹介については、様々な考え方があったことを多面的に把えさせるよう留意する。

2. 明治後期～大正初期の日中民間交流にみる日本観と中国観

(1) 教材として取り上げた理由 今日、アジア諸国は、日本に対して多くの留学生を派遣し、日本の経済発展などに学ぼうとしており、日本への期待感の高いものがある。日清戦争直後にも中国において日本への留学熱が高まったことがある。また、この時期には、孫文をはじめ中国の革命運動に身を投じた人々が日本に多数亡命し、宮崎滔天など中国問題に関心を持つ様々な立場の人々と盛んに交流した。しかし、近代化の模範とアジアの連帯を求めて来日した中国人留学生・亡命者の期待は、日露戦争の勝利を契機とする日本の帝国主義の進行に伴い、批判と反発へと変化した。そこで、明治後期から大正初期の中国人留学生・亡命者の日本観の変化と日本人の中国観を理解させることを通して、アジア諸国との真の友好関係について考察を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は、4時間構成の第4時限にあたる。第1時限では「日清戦争と中国分割」、第2時限では「日露戦争と戦後の国際関係」、第3時限では「第一次世界大戦と日本の中国進出」を取り上げる。本時では、日清戦争直後から五・四運動までの期間に、日本を訪れた中国人留学生や亡命者の日本観とその変化、また、彼らと積極的な交流をもち、アジアの近代化を構想した日本人の中国観について理解させる。特に、日本が脱亜と帝国主義へと転換するこの時期に、アジア近隣諸国との国際関係において、民主的な連帯をめざそう

とする思想や運動があったことを、宮崎滔天と孫文の交流を通して考察させる。学習指導要領では、「日本史B」の「(5)近代日本の形成とアジア」の「ウ 国際関係の推移と近代産業の発展」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・前時までの復習	○日清戦争から第一次世界大戦までの日本のアジアに対する外交政策を帝国主義への進行を示す諸事項を中心に、ワークシートで作業して確認する。	・ワークシート
展 開	・中国人留学生・亡命者の動向 ・日本人の中国観	○中国人留学生・亡命者の来日目的と日本観について、清国政府の「中体西用」政策、また、中華思想からの脱却をめざす社会的背景を関連させて理解する。 ①アジアにおける近代化の先駆者としての日本（西洋文明を学ぶための日本）について ②中国の民族独立・民主主義確立のための日本（孫文の「大アジア主義」講演と日本の反応）について ○「大東亜共栄圏」構想へとつながり「アジア主義」と総称された様々な外交論を通して、日本人の中国観を、民権論から国権論への変質と帝国主義の進行に伴う国内情勢を関連させて理解する。 ①弱小民族を併呑する「アジア主義」について ②帝国主義からの被圧迫民族の解放と平等を実現する「アジア主義」(宮崎滔天の世界民主化革命思想)について	・資料「中国留学生史談」「三十年日記（清国人日本留学日記）」「日本留学精神史」「留日回顧」「近代日中交渉史話」「孫文選集」 ・資料「アジアと近代日本」「近代日本の中国認識」「三十三年の夢」「中国・朝鮮論」
ま と め	・アジア諸国と日本との相互協力	○民主的で平和的なアジア世界の形成に尽力した人々の足跡を通して、真の友好に基づいた国際関係について考察する。	・資料「二つの顔の日本人」

(4) 評価の観点 ①明治後期から大正初期に来日した中国人留学生や亡命者の期待と脅威などが交錯した複雑な日本観を理解できたか。②帝国主義の進行する日本にあって、アジア諸国との連帯や民主化に奔走した人々の思想や行動について理解できたか。

(5) 指導上の留意点 ①論説や書簡、滞在日記などの難解な表記については、現代語訳した資料を提示するよう配慮する。②論説などの解釈に当たっては、様々な立場の解釈を提示し、一面的な解釈に陥らないよう配慮する。

3. 朝鮮半島からの労働者の移住と日本社会

- (1) 教材として取り上げた理由 人の国際化の進展に伴い、日本で生活する外国人労働者は増加している。この国際化する日本にあって、生活文化の違いなどによる、外国人労働者に対する差別観や偏見が問題になることがある。こうした問題は、現在だけでなく、過去の日本社会にも存在した。韓国併合後、朝鮮半島から労働者が移住してきた時期、日本人労働者の経済的な危機意識や、生活様式に対する無理解などがきっかけになり、関東大震災の混乱のなかで、殺害事件が生じたことなどがあげられる。そこで、関東大震災を事例として、韓国併合後の朝鮮半島からの労働者の移住を、日本社会がどう受けとめたのかを考察させ、また阪神・淡路大震災時の救援活動において、各国の人々が相互に協力した姿を理解させることを通して、民族共生の在り方を考えさせることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時は3時間構成の第2時限にあたる。第1時限では「戦後恐慌から金融恐慌」、第3時限では「金解禁と世界恐慌」を扱う。本時では、韓国併合後の朝鮮半島からの労働者の移住を日本の社会がどのように受けとめたのかを、日本の植民地政策と経済的背景から考察させる。また、関東大震災の混乱のなかにあつて、朝鮮半島からの労働者の側に立って発言、行動した日本人がいたことを理解させるとともに、阪神・淡路大震災における各国の人々が相互に協力した姿から、国際社会に生きていく人間としての認識を高めさせる。学習指導要領では、「日本史B」の「6 両世界大戦と日本」の「ア 第一次世界大戦と日本の経済」で扱う。
- (3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・ 在日外国人労働者の現状と問題点	○外国人登録者数の推移、国籍別外国人登録者数、外国人意識調査などから、在日外国人労働者の現状と問題点を理解する。	・ 資料「小金井市在住外国人意識調査」
展 開	・ 韓国併合と労働者の移住 ・ 日本社会への影響 ・ 関東大震災のなかでの事件と事件への批判	○韓国併合後の土地調査事業、産米増殖運動などにより、農民などの没落が進み、大戦景気にわく日本へ移住する人々が多くなったことを理解する。 ○戦後恐慌期、企業が朝鮮半島からの労働者を低賃金で雇い入れたため、日本人労働者のなかに危機意識と差別意識が高まっていったことを理解する。 ○関東大震災の混乱のなかで殺害事件が起こったことを知る。 ○関東大震災直後の地方新聞が偏見を持った報道を行い、人々が不安と恐怖を抱いたことを知る。 ○横浜鶴見警察署長大川常吉の決断によって、多くの人命が救われ、第二次世界大戦後、顕彰碑が建立されたことを知る。	・ 年表、グラフ ・ 資料「荘内新報」「下越新報」 ・ 資料「神奈川県警察史」「顕彰碑」 ・ 写真

		○弁護士山崎今朝弥が事件を謝罪すべきだと主張したことを知る。また事件の背景にある植民地政策を批判し、朝鮮半島の独立を論じたことを理解する。	・資料「地震・憲兵・火事・巡査」
まとめ	・諸外国の人々との国籍を越えた共生	○阪神・淡路大震災における在日外国人の被害を調べ、そこでの救援と協力の様子などから、人の国際化の進展する日本のなかで、諸外国の人々と共生していくことの意義を考察する。	・「神戸新聞」

(4) 評価の観点 ①朝鮮半島からの労働者の移住の背景を、日本の植民地政策や当時の経済状況から理解することができたか。②経済的な対立や異なる生活文化への不寛容が、偏見や差別を生み出したことを理解することができたか。③人の国際化の進展する日本のなかで、共生の努力の必要性を理解することができたか。

(5) 指導上の留意点 ①当時の新聞などの資料を通して、朝鮮半島からの労働者の移住により起こった問題を具体的・実感的に理解させるように配慮する。②関東大震災のなかで起きた事件などについては、その社会的背景や現代的意味にも触れ説明するように配慮する。

4. 国際法からみた日中開戦について

(1) 教材として取り上げた理由 現代の国際社会にみられる様々な国際紛争は、国際法上の正式な戦争として扱われることがない。1937年の盧溝橋事件に始まる日本と中国との戦争についても、当時の日本政府が「支那事変」と称したことからも知られるように国際法上の正式な戦争ではない。これは、戦時国際法において、宣戦布告による正式な戦争では、中立国から戦争当事国への軍需物資の輸出が禁止されたためである。そこで、国際法上の平時と戦時の規定について理解させることを通して、現代の国際社会で起こっている紛争と呼ばれている武力衝突についての認識を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は、3時間構成の第2時限にあたる。第1時限では、山海関占領から第二次国共合作に至る時期の日中関係、第3時限では、南京占領から第一次近衛内閣総辞職までの日中戦争の推移を扱う。本時では、「開戦ニ関スル条約」を説明し、開戦法規締約、批准後の事例として第一次世界大戦への参戦や二十一か条要求について理解させる。また、盧溝橋事件以降、両国が国際法上の戦争としなかった理由を「海戦ノ場合ニ於ケル中立国ノ権利義務ニ関スル条約」などによって理解させる。さらに、近衛首相による「爾後国民政府ヲ对手トセス」との声明が「事変」の短期終結を困難にしたことなど、「事変」中の外交について理解させる。学習指導要領では「日本史A」の「(4)近代日本の形成と展開」の「オ 両大戦をめぐる国際情勢と日本」、「日本史B」の「(6)両世界大戦と日本」の「ウ 第二次世界大戦と日本」で扱う。

(3) 展開例

学習項目	学 習 活 動	備 考
------	---------	-----

導入	<ul style="list-style-type: none"> ・日中戦争勃発前の情勢 	○広田弘毅内閣の総辞職から、林銑十郎内閣の成立、総辞職、第一次近衛文麿内閣の成立に至る国内の政治情勢を理解する。	・年表
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・盧溝橋事件 ・開戦法規 ・戦争でなく事変とした理由 ・華中への拡大期の内閣の対応 ・「国民政府ヲ对手トセス」 	<ul style="list-style-type: none"> ○盧溝橋事件の勃発と、これについて現地軍が休戦協定を結んだにもかかわらず近衛内閣が華北派兵を決定したことを理解する。 ○「開戦ニ関スル条約」を紹介し、開戦には宣戦布告か最後通牒が必要であることを考察する。 ○日本と中国の両国が宣戦布告をしなかったことについて、「中立国ノ権利義務ニ関スル条約」を通して、中立国からの軍需物資の輸入が不可欠な日中両国の事情を理解する。 ○近衛内閣による「暴支膺懲」声明により、日本は中国を事実上の敵国とみなすことになったことを理解する。 ○近衛首相の声明「国民政府ヲ对手トセス」を示し、この声明が両国大使の引き揚げを生じさせ、日中戦争の收拾を困難にしたこと、また、中国国民を敵視していないという政府の見解と矛盾していたことを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料「東京朝日新聞」記事 ・資料「開戦ニ関スル条約」 ・資料「海戦ノ場合ニ於ケル中立国ノ権利義務ニ関スル条約」 ・資料「東京朝日新聞」記事 ・資料「東京朝日新聞」記事
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・日中戦争の性格 	○日中戦争は国際法上の正式な戦争とはいえないが事実上の戦争であった。また、陸軍が始めた戦争とはいえない、日中戦争長期化には近衛内閣の対応に大きな責任があったことを理解する。	

- (4) 評価の観点 ①日中戦争の国際法上の位置づけと、日中両国が宣戦をせず「事変」とした理由を理解できたか。②日中戦争の本格化には、近衛内閣の中国政策によるところが大きかったことを理解できたか。
- (5) 指導上の留意点 ①国際条約については、資料の読み取りに十分時間を取るなどして、条約の内容についての理解を深めさせるよう配慮する。②新聞記事の資料については、資料の意味を正確に理解させるよう配慮する。

5. 日本軍政下のシンガポールにおける民間交流

- (1) 教材として取り上げた理由 中国との戦争が長期化すると、日本はその打開策を南方進出に求め、英米など連合国との戦争に踏みきった。この戦争で、日本はアジア近隣諸国の多くの地域を軍政下におき、多くの人々に惨禍をもたらした。しかし一方、戦時下のもと、シンガポールにおいて、日本の科学者たちが博物館と植物園を守るために英国の科学者たちと

協力し合うなど、日本の民間人の中には、その立場を越えて対戦国の国民との友好に努めた例も多くあった。そこで、日本軍政下のシンガポールにおける日英の友好、協力を事例として、人類愛に基づいた民主的で平和的な国際関係の実現に努めることの重要性について考察を深めさせることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は「太平洋戦争とアジアの民衆」をテーマとした授業の中で取り上げ、3時間構成の第3時限にあたる。第1時限では「第二次世界大戦の勃発」を、第2時限では「太平洋戦争の勃発と戦局の推移」を扱う。本時では、日本の軍政下におかれたシンガポールを題材として、アジアを欧米の植民地支配から解放し「大東亜共栄圏」の建設を名目として行われた戦いが、実際には、アジア諸民族に多大な惨禍をもたらしたことを理解させる。また、敵対する関係にありながら、マレー半島の歴史と文化の貴重な宝庫である博物館と世界屈指の熱帯植物園を守るために協力しあった人々がいたことを理解させる。学習指導要領では、「日本史B」の「(6)両世界大戦と日本」の「ウ 第二次世界大戦と日本」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・前時の復習	○シンガポールなど、日本の占領地域を地図上で確認する。	・地図「日本軍占領地図」
展 開	・シンガポールの歴史 ・日本軍政下のシンガポール ・昭南博物館をめぐる日英民間人の協力	○シンガポールの歴史を概観し、この島がイギリスのアジア最大の拠点であったことを理解する。 ○日本軍政下のシンガポールの実態を理解する。 ①イギリスの植民地支配から日本軍占領によって昭南島と改称され、以後3年6カ月の間、日本軍政下におかれたこと。 ②日本軍によって、シンガポール在住の多くの中国人が、「抗日分子」として殺害されたこと。 ③日本軍の軍用手票（軍票）の濫発によって、米の値段が3年6カ月の間に約150倍に高騰するなど、激しいインフレがおきたこと。 ○日本の軍政下で、昭南博物館および植物園が略奪と破壊の危機にみまわれたことを知る。 ○館長・園長になった田中館秀三らは、戦争中という極めて困難な状況の中で、献身的な努力をし博物館と植物園を守り抜いたことを理解する。 ○イギリス人科学者は解放され、そのまま研究を続けたこと、資料や文献は散逸を免れ、日本の敗戦後は元のままで返還されたことを理解する。	・年表、写真「シンガポール」 ・資料「シンガポールの歴史教科書」 ・写真「郡票」 ・資料「思い出の昭南博物館」 ・写真「国立博物館」「植物園」

まとめ	・日本とアジア諸国との交流、連帯	○日本の軍政下で、戦争当事国の日英の科学者が敵味方でありながら協力しあった事実を理解し、今後、アジア諸国とどのように連帯していくべきかを考察する。
-----	------------------	---------------------------------------------------------------------------

(4) 評価の観点 ①日本軍政下のシンガポールを通して、日本の占領下におかれたアジアの地域の実態が理解できたか。②日本軍政下の中で、文化財と学問を守るために努力した日本人科学者とイギリス人科学者たちの連帯とその功績を理解することができたか。

(5) 指導上の留意点 ①資料、写真などを活用して、日本軍政下のシンガポールの様子を実感的に捉えさせるよう配慮する。②具体的事例をあげ、戦争当事国の国民相互の協力がいかに困難であったかを理解させるよう配慮する。

6. 朝鮮半島の人々との交流に貢献した日本人

(1) 教材として取り上げた理由 大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国は日本の隣国であり、古来より日本と密接な関係にあったが、近代においては、植民地支配・被支配という歴史を経験した。韓国併合後の日本の植民地政策やそれによって引き起こされた諸問題を認識すること、また、朝鮮半島の人々との友好に貢献する生き方をした人物が存在したことを知ることなどは、これからの国際社会に生きる人間としての資質の育成に大切であると考え、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は、5時間授業の第5時限にあたる。第1時限では、大韓民国の史跡・博物館の紹介を通して、朝鮮半島と日本との関係を概観させる。また、現在の大韓民国において、植民地時代の日本の諸政策や抗日運動家がどのように評価されているかを理解させる。第2時限では強制連行、従軍慰安婦、B・C級戦犯などを学習させる。第3時限では、福沢諭吉や伊藤博文の言説を通して日本の植民地支配の背景にあった思想を理解させる。また、伊藤博文を殺害した安重根がどのようなアジア観を持っていたかを理解させる。第4時限では、「朝鮮半島の人々との交流に貢献した日本人(1)」として、安重根と交流を持った日本人看守の千葉十七と、朝鮮文化の価値について、柳宗元に示唆を与えた工芸研究家の浅川巧について学習させる。本時では、「朝鮮半島の人々との交流に貢献した日本人(2)」として、禹長春と李方子について学習させる。学習指導要領では、「世界史A」の「(4)現代世界と日本」の「ウ 民族主義とアジア・アフリカ諸国」で扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・前時の復習	○千葉十七と浅川巧の生涯をふりかえり、彼らがどのように友好に貢献したのか確認する。	・ワークシートの配付
	・禹長春の生い立ち	○閔妃殺害事件に関係した軍人の父と亡命後知りあった日本人の母との間に生まれ、母の手によって日	・写真「明成皇后遭難之地碑」

展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長春の渡韓と農業指導 ・ 李方子の結婚 ・ 方子の渡韓と福祉事業 	<p>本で育てられた長春の生い立ちを知る。</p> <p>○農学博士となり育種業界で活躍していた長春が大韓民国でおこった招聘運動にこたえ、第二次世界大戦後間もない時期に渡韓したことを知る。</p> <p>○長春が家族を日本に置いて大韓民国に渡ろうと決意した理由を考える。</p> <p>○長春が、大韓民国では教科書に取り上げられるほど高く評価されていることを知る。</p> <p>○梨本宮家に生まれ李朝王子李垠と結婚し、皇族の一員として過した戦前の方子を知る。</p> <p>○戦後、方子が夫とともに大韓民国に渡り、福祉事業に従事したことを知る。</p> <p>○方子が、大韓民国での永住を決意した理由を考える。</p> <p>○方子による福祉事業などの活動に対する様々な評価を通して、日韓関係の現状について理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資料「長春の渡韓後の談話と臨終の言葉」「禹長春博士追悼文」 ・ 新聞「李王家の御慶事」 ・ 資料「李方子自伝」「晩年の韓国での方子」
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・ 民間交流の役割 	<p>○長春や方子などは、国策的な立場からではなく、民間における一個人として大韓民国の人々との友好に貢献したことを理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 興味を持った人物についての感想文の作成

- (4) 評価の観点 ①禹長春、李方子の生き方を通して、国際社会における民間交流の果たす意義について理解できたか。②時代における政治状況が個人の生涯に大きな影響を与えたこと、また、真の友好に基づく日韓関係の在り方について考察できたか。
- (5) 指導上の留意点 ①写真・談話・新聞記事などは、禹長春、李方子の生涯が実感的に扱えられるよう、構成を工夫する。②感想文を書かせるにあたっては、あらかじめ着目点を説明しておく。

II 現代の国際的課題と歴史的背景

1. 資本主義形成期における貧困

- (1) 教材として取り上げた理由 日清・日露戦争の前後の時期は、明治政府の殖産興行政策を土台として、金融制度の確立や産業基盤の整備も伴い、産業革命が軽工業から重工業へと進展し、資本主義の基礎が確立していった時期である。また、この時期、日本の産業構造の変化により、農村から都市への人口流入が著しくなるとともに、農村から海外への移民も生じた。そこで、明治時代の都市の貧民問題と移民を事例として取り上げ、資本主義形成期における貧困の社会的背景について理解を深めさせるとともに、現代の国際的課題である貧困問題について考察を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は3時間構成の第2時限にあたる。第1時限では、日清・日露戦争の前後の時期における資本主義の確立と寄生地主制の広がりについて理解させる。本時では、農村から都市への人口流入による貧民問題について東京を事例として理解させる。また、ベンゲット移民を取り上げ、貧困に起因する問題として移民について理解させるとともに、現代の国際社会における外国人労働者の問題についても考察させる。第3時限では、労働問題や社会主義運動について理解させる。学習指導要領では、「日本史A」の「(4)近代日本の形成と展開」の「ウ 近代産業の発展と国民の生活」、「日本史B」の「(5)近代日本の形成とアジア」の「ウ 国際関係の推移と近代産業の発展」で扱う。

(3) 展 開 例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・農村での寄生地主制の広がり	○前時の復習をするとともに、農村での寄生地主制の広がりによって、生活に困窮した小作農が職を求めて都市に流入したことに着目する。	・「小作農の増加に関する表」
展 開	・東京の人口増加 ・貧民問題 ・移民の背景 ・ベンゲット移民	○日露戦争の前後の時期における東京の人口増加が他県からの流入によることが多いことを通して、寄生地主制の広がりを理解する。 ○急激な人口増加に対して、工業化が追いつかず、労働力を受け入れきれなかったことを理解する。 ○資本主義形成期の東京における貧民問題について考察する。 ①東京の工場労働者の低賃金について ②「共同長屋」「木賃宿」などの住環境について ○都市労働者の貧困について理解するとともに、日本と海外での賃金格差を通して、高額の賃金を求めて海外への移民が行われたことを理解する。 ○フィリピンへのベンゲット移民から移民の様子や問題点を理解する。	・「東京の人口動向」 ・「宿泊延べ人数」 ・「東京の工場数」 ・「東京の工場の日給」 ・「細民の家賃」 ・「長屋構造図」 ・「海外での賃金に関する表」 ・「海外移民数」 ・「到着移民の況に関する表」 ・「ベンゲット移民の死亡者数」
ま と め	・資本主義形成の過程と貧困 ・現代の問題	○19世紀より資本主義的世界システムにアジアが組み込まれていく中で、欧米型の資本主義経済を築こうとする日本の社会に生まれた構造的な問題の一つが貧困であったことを考察する。 ○現代の発展途上国の貧困や外国へ働きに行く労働者の問題と類似する側面があったことを考察する。	・「国別労働力送出国動向」

(4) 評価の観点 ①明治期の貧困が資本主義の成立過程における産業構造の変化にともなう

問題であったことを理解できたか。②ベンゲット移民をはじめ外国への移民が行われた社会的背景を理解できたか。③現代の発展途上国のかかえる外国へ働きに行く労働者の問題が日本にも存在したことを理解できたか。

- (5) 指導上の留意点 ①資料やグラフ、図版などの読み取りに際しては、着目点を説明しておき、明治時代の貧困の状況を具体的に考察させるように配慮する。②明治時代の日本と現在のフィリピンの社会的状況の相違に配慮し、ベンゲット移民と現代の日本などにおける外国人労働者の問題について説明する。

2. フィリピンの独立運動と経済的困窮

- (1) 教材として取り上げた理由 近代にはいると、東南アジア諸国の多くは資本主義的国際経済に組み込まれ、伝統的な地域経済は崩壊し、植民地宗主国に依存せざるを得なくなった。第二次世界大戦後、東南アジア諸国は、独立を達成するが、国際経済における構造的矛盾のなかで、経済的自立が難しく、多くの国々が経済的に困窮した状況にある。今日、東南アジア諸国と日本との関係は、政治・経済・文化の各方面で緊密になっている。しかし、東南アジア諸国と日本との関係が、必ずしも東南アジア諸国の社会発展に結びついているとは言い難い。そこで、典型的な植民地経済に陥り、現在も経済的自立を目指すフィリピンを事例として取り上げ、東南アジア諸国の経済が共通してかかえる構造的問題の理解を深めるとともに、発展を阻害してきた要因を考察させることを通して、今後の友好関係の在り方を探ることをねらいとして、本教材を取り上げた。

- (2) 本時のねらい 本時は「世界史A」の「(4)現代世界と日本」の「(ウ)民族主義とアジア・アフリカ諸国」、「世界史B」の「(6)20世紀の世界」の「(イ)アジア・アフリカ諸国の民族運動と独立」で扱い、「第三世界の抱える諸問題」をテーマとして1時間の授業として構成する。19世紀中頃から現代に至るフィリピンの歴史を取り上げ、スペイン及びアメリカの植民地支配によるモノカルチャー経済の形成と、その結果生み出された貧困の過程を理解させるとともに、現在のフィリピンの抱える諸問題の歴史的背景を、植民地時代に形成された社会構造を通して理解させる。また、今後のフィリピンと日本の共存関係のあり方を考えさせる。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・現在のフィリピンの貿易	○輸出品目には、輸入部品を組み立てた工業製品と一次産品が多く、先進国への依存型経済であることを理解する。	・「世界国勢図会」 ・「アジア経済1995」
展	・スペイン支配の内容と独立運動	○16世紀中頃、スペインの領有宣言により、フィリピンの領域の大枠が策定されたことを理解する。 ○東洋貿易の中継拠点からプランテーション経営へと支配方針が転換されたことにより、大土地所有制	・「フィリピン」の名の由来 ・「ガレオン貿易」

開	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカからの独立運動 ・日本の占領 ・戦後のフィリピン経済 	<p>が進展し、貧富の差が拡大したことを理解する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○アメリカ支配で領域が確定したこと理解する。 ○アメリカの植民地支配のもとで、プランテーション農業が拡大し、アメリカ依存の経済になったことを理解する。 ○アメリカとフィリピンの不平等貿易の実体を知る。 ○日本の占領で商品経済が崩壊したことを知る。 ○アメリカがフィリピン独立の早期承認とひきかえに不平等貿易を存続させ、フィリピン国内に不満が高まったことを理解する。 ○近年、日本への経済的依存度が拡大したことを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ペイン＝オールドリッチ関税法」 ・「タイディングス＝マクダフィ法」 ・「ベル通商法」 ・対米・対日貿易比率
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・フィリピン社会の持つ課題 	<ul style="list-style-type: none"> ○現在のフィリピンの直面する政治的・経済的課題、環境問題などを構造的に把握することを通して、今後の発展方向を考察する。 	

(4) 評価の観点 ①スペイン、アメリカ両国の植民地支配がフィリピン社会に対して政治的・経済的・文化的に大きな影響を与えたことを理解できたか。また、独立後のフィリピン社会の枠組みに大きな影響を与えたことを理解できたか。②現代の国際経済のなかで、フィリピン経済の抱える問題が理解できたか。

(5) 指導上の留意点 ①統計・図表などの実証的資料により、フィリピンの近現代史を客観的に理解させるように配慮する。②フィリピンの貿易統計などの資料を活用し、植民地支配がフィリピンの地域社会を構造的に変化させたことを具体的に理解させるよう配慮する。

3. フィリピン革命にみられる国民国家観

(1) 教材として取り上げた理由 現代の世界各地にみられる民族問題は、政治・経済的問題にとどまらず、複雑な歴史的背景をもち、国家の体制や在り方に影響を及ぼしている。第二次世界大戦後、東南アジア諸国は次々と独立を達成したが、欧米列強によりつくられた国境線を引き継ぎ独立したため、民族の分断、政治共同体と民族の不一致という矛盾が生じ、民族対立や貧困などの問題を抱える結果となった。そこで、19世紀末以来の独立運動のなかで国民国家の建設を目指したフィリピンを事例として、国民意識の形成の過程に着目させ、独立後の民族問題の要因を考察させることをねらいとして、本教材をとりあげた。

(2) 本時のねらい 本時は3時間構成の第2時限にあたる。第1時限では、スペインによる植民地化とカトリック布教を取り扱う。本時では、19世紀末の思想家ホセ＝リサールと、彼の構想をもとにフィリピン革命を指導したアギナルドの活躍を理解させるとともに、この構想にはイスラム地域の住民など非カトリック教徒が含まれていなかったため、独立後のフィリピンの民族問題の遠因となったことを考察させる。第3時限では、フィリピンが国民国家

として独立した経過と独立後の民族問題の様々な要因や背景を理解させる。学習指導要領では、「世界史B」の「(7)現代の課題」の「ア 国際対立と国際協調」で扱う。

(3) 展 開 例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・ホセ＝リサールの生い立ちと業績	○フィリピナスという祖国とフィリピノスという国民の構想を描いたホセ＝リサールが、留学を機にフィリピン人としての自覚をもったことを理解する。	・図版「ホセ＝リサールの肖像画」
展 開	・フィリピン革命の勃発 ・アギナルドの台頭 ・米西戦争の勃発 ・マロロス憲法の制定 ・多民族国家フィリピン	○スペインの支配に苦しむ民衆が秘密結社カティプーナンを組織し、武装蜂起したことを理解する。 ○フィリピン革命の指導権をアギナルドが掌握し、ホセ＝リサールの思想やカティプーナンのカトリック信仰を引き継いだことを理解する。 ○米西戦争に勝利したアメリカがスペインからフィリピンを獲得したことを知る。 ○スペイン軍を破ったアギナルドがフィリピン建国とマロロス憲法施行を宣言したことを知る。 ○マロロス憲法では国民主権と信教の自由を説いているが、アギナルドは南部のムスリムなど非カトリック教徒をフィリピン国民の中に明確に位置づけようとはせず、また、カトリックを国民統合の理念にするため、信教の自由を停止したことに着目する。 ○ホセ＝リサールの描いた西欧型の国民国家観が、アメリカの植民地統治を経て1935年の独立準備政府に受け継がれたため、英語を使うカトリック教徒が多数派を形成し、その結果、ムスリムなど非カトリック教徒が少数派となったことを理解する。	・図版「アギナルドの肖像画」 ・地図「東南アジア・太平洋」 ・資料「マロロス憲法（抜粋1～3条）」 ・地図「フィリピン」 ・資料「1935年憲法（抜粋）」 ・資料「フィリピンの言語分析と宗教文化圏」
ま と め	・民族共生	○多数派と少数派の拮抗が、国民国家における民族問題の大きな要因になっていることを理解する。 ○宗教や言語などの問題を通して、国民国家における民族共生のあり方を考察する。	

(4) 評価の観点 ①フィリピンが西欧型の国民国家をモデルに独立した歴史的背景を理解できたか。②アメリカの植民地支配は英語を使用するカトリック教徒のフィリピン人を優遇し、その結果、新しい支配層が形成されたことを理解できたか。③国民国家における民族共生の方策として、多文化主義・多言語主義を理解できたか。

- (5) 指導上の留意点 ①主要な言語分布と宗教文化圏の地図を活用し、フィリピンの複雑な民族構成を理解できるよう配慮する。②発問により、世界における民族問題の事例をあげさせ、民族問題が世界各地で頻発し、国際社会における大きな課題になっていることに気付かせるよう配慮する。

4. フィリピンの都市問題とその背景

- (1) 教材として取り上げた理由 今日、東南アジア諸国には先進国などの外国資本が多く進出し、農村の経済をはじめ国内経済に大きな影響を与えている。こうしたなかで進められている「緑の革命」などの農村の改革は、農民の生活を必ずしも豊かなものにしてはいえず、農村から都市へ仕事を求めて流出する人が後を絶たない。そのため都市では、失業問題や住宅難などの都市問題が生じている。そこで、フィリピンの都市問題を事例として取り上げ、その原因が単に農村の人口増加などの国内問題だけではなく、先進国との経済関係の中で生じている構造的な問題にも一因があることを理解させることを通して、今後の日本と東南アジア諸国との経済関係を考察させることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時は、3時間構成の第2時限にあたる。第1時限は、マニラ市における失業問題や住宅難などの都市問題と、都市に多くの人口が集中してくる理由について考察する。本時では、都市問題が農村からの大量の人口移動が原因であること、また、農村の生活が豊かにならない理由を、農業関連の外国企業などが影響を与える経済構造などを通して理解させる。第3時限は、フィリピンにおける都市への人口流入や日本などへの出稼ぎ労働は、農村や都市における貧困から生まれるものであり、貧困の原因は国際経済における先進国と発展途上国との間の構造的な問題などにもあることを理解させる。学習指導要領では、「地理B」の「(3)生活と産業」の「エ 産業・人口の都市集中と都市問題」で取り扱う。

(3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・フィリピンの人口移動	○フィリピンの国内における人口移動の様子を知る。 ○農村から首都マニラとその周辺部への人口移動は、近年増加傾向にあることを理解する。	・資料「フィリピン地方間人口移動(1948～80年)」
展	・人口移動の理由 ・農村が豊かになれない理由(緑の革命)	○農村から都市への人々の移住について考察する。 ①仕事を求めて移住する人々が圧倒的に多いこと ②首都マニラに比べ農村の所得が低いこと ③移住者の多くは土地を持たない農民であること ○農村が豊かになれない理由を「緑の革命」を通して考える。 ①「緑の革命」により土地生産性が急激に増大し、食糧自給が可能になったこと、しかし、近代的な	・資料「出身地方別の移住理由」 ・資料「地方別月家族所得(1980年)」 「地方出身世帯主の移住前職業」 ・資料「米の土地生産性の推移

開	・「緑の革命」の受益者	農法が必要になり、耕作方法が変化したこと ②農民の多くは借金が増え、生活が変化したこと ○「緑の革命」で多くの利益を得たのは商人、請負業者、金融機関、外国の農業関連企業（アグリビジネス）であったことを理解する。 ○豊かになれない農民が多く離農して都市へ流入していることを理解する。	(1971年・1980年) 「農作業別雇用労働力依存度の変化」 「稲作生産費支出パターンの変化」 ・資料「収穫物分配構造の変化」 「農業機械輸入」 「輸入化学肥料」
まとめ	・フィリピン農村と国際経済との関係	○フィリピンの農村の人々の生活と国際経済との関係について考察する。 ○都市の人口の増加と失業問題や住宅難などの都市問題の背景について考察し、まとめる。	・構造図「農民および商人と外国企業との関係」

- (4) 評価の観点 ①フィリピンの都市問題と農村の人々の生活との関係について理解できたか。②発展途上国の都市問題を国際経済との関連で理解することができたか。
- (5) 指導上の留意点 ①資料の読みとりには、十分時間を取り、考察した内容を発表させる。
②先進国とフィリピンの一農村との結びつきについての資料は、農村と国際経済との関係についての構造図を事前に作成しておく。

Ⅲ 日本における文化受容 — 身近な素材を通して

地理歴史

1. 花と日本人

- (1) 教材として取り上げた理由 「茶の湯」、「いけ花」など、「日本の伝統文化」と呼ばれているものには、わが国独自の文化ではなく、中国文化などの影響を受けて成立し、発展したものが多。例えば「いけ花」は、花や木を信仰の対象としたわが国の基層文化に、中国から伝来した仏教の供花などが影響を与えたことにより成立し、室町時代以降に発展したものである。そこで、花と日本人とのかかわりを事例として取り上げ、わが国の文化の構造の重層性を理解させることを通して、文化の交流の持つ意味を認識させることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時は3時間構成の第3時限にあたる。第1時限では「唐代の文化の国際性」を、第2時限では「唐代の文化の東アジア諸国への波及」を取り上げる。本時では、その具体例として花と日本人とのかかわりを取り上げ、わが国の伝統文化の一つである「いけ花」の成立に中国文化が影響を与えたことを考察させる。学習指導要領では、「世界史A」の「(2)諸文明の接触と交流」の「イ 8世紀の世界」、「世界史B」の「(2)東アジア文化圏の形成と発展」の「ア 遊牧民族の活動と東アジア世界の形成」で扱う。
- (3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・わが国の伝統文化としての「いけ花」	○「いけ花」は日本の伝統文化の一つであることを確認する。	・写真、または実物の用意
展 開	・わが国の風土と花 ・信仰の対象としての花 ・中国文化の伝来と「いけ花」の成立 ・「いけ花」の発展	○わが国には明確な四季の変化があり、季節に応じてさまざまな花が咲くことから、花は身近な存在であったことを理解する。 ○仏教の供花などの伝来以前より、わが国では花や木を信仰の対象としてきたことを理解する。 ①正月に門松を立て一年の安全などを祈ることから、樹木は神の依代であったこと ②花見が豊作を占う農耕儀礼として始まったことから、桜は豊穡と繁栄の象徴であったこと ○花が信仰の対象から観賞の対象へと変化し、「いけ花」が生まれたことを理解する。 ①中国から仏教とともに伝来した供花、花合の流行、また中国の花奔園芸が影響を与えたこと ②中国絵画が伝来したことから「床の間」が発生し、「いけ花」（立花様式）の法則が整ったこと ○豪華な立花様式は江戸時代に大成し、また簡素な生花様式も生まれ、「いけ花」が社会に普及したことを理解する。 ①立花様式は、頂法寺池坊を中心に発展したこと ②禅宗の影響から生まれた「茶の湯」の精神を取り入れ、生花様式が生まれたこと	・ワークシートの作成 ・「万葉集」 ・「慕婦絵詞」 ・「枕草子」 ・「大住院立花砂之物図」、「插花百規」
	・国際化と文化交流	○「いけ花」の成立、発展の事例から、今後も、国際化の進展にともなう異文化との交流は、わが国の文化の発展に寄与するだろうことを推測し、文化交流の重要性について考察する。	・ワークシートの作成

(4) 評価の観点 ①「いけ花」の成立を通して、日本文化の基層における重層的な構造を理解できたか。②多くの日本の伝統文化は、中国などの文化の影響を受け、国際性を持っていることを理解できたか。

(5) 指導上の留意点 ①「いけ花」の説明にあたっては、絵、写真などを効果的に活用し、具体的に理解できるよう配慮する。②「いけ花」の成立を通して、日本の文化交流の一般的な特色を理解させるよう留意する。

2. 飲茶の習慣を通して見た日本と新疆ウイグル自治区

- (1) 教材として取り上げた理由 地域の文化は、長い歴史の中で、他地域の文化との接触や交流により同質化が進む一方、地域の風土と深くかかわりあいながら、独自の文化的特質を形成している。日本人の生活の中に深く根付いている飲茶の習慣は、茶樹の生育の自然環境に恵まれた東アジアにおいて高度に成熟するが、茶樹栽培に適さない乾燥した中国内陸地域や寒冷なシベリア、ヨーロッパなどにも伝わりそれぞれの地域の自然環境や社会環境と深くかかわりながら地域的特色を生み出している。そこで生徒にとって身近な飲茶の習慣を素材として、日本と乾燥地域の飲茶の習慣の比較を通して、世界の諸地域の文化の一般的共通性と地方的特殊性を考察させるとともに、異文化に対する理解を深めさせることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時は6時間構成の第3時限にあたる。第1時限は「様々な茶」、第2時限は「茶の起源と漢民族」、第4時限は「イギリスと茶」、第5時限は「現代のお茶」、第6時限は「茶の博物館」を学習する。本時では、日本と新疆ウイグル自治区の飲茶の習慣の比較考察を通して、自然環境や社会環境の特性について理解させる。学習指導要領では、「地理A」「(2)世界の人々の生活・文化と交流」の「イ 諸民族の生活・文化」で扱う。
- (3) 展開例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・漢民族からの伝播	○当初は茶が葉として、漢民族へ広がり、漢民族から周辺地域へ広がった様子を確認する。 ○漢民族が日本や新疆ウイグル自治区に伝えた団茶は、運搬に便利であったことを知る。	・実物「団茶」
展 開	・日本の茶の文化	○栄西による茶の種子の伝播と茶の生産地との関係について理解する。 ○飲茶が、貴族、武士の文化の一つとして発達したことを理解する。 ○飲茶習慣の庶民への広がりについて、室町時代の門前茶屋や江戸時代の簡便な煎茶製法などを通して理解する。 ○日本の様々な地域の製茶法や飲み方が、地域の自然環境、社会環境に影響されていることを理解する。 ①山茶栽培②嬉野茶③碁石茶④畦畔茶⑤山村の製茶⑥ポテポテ茶⑦結納茶⑧お茶講 ○日本と新疆ウイグル自治区の気候とを比較し、その違いについて考察する。 ○新疆ウイグル自治区の遊牧民が、現在でも団茶を飲んでいる理由を自然環境や社会環境の関係から考察する。	・実物「茶の葉」 ・実物「茶道道具」 ・模型「門前茶屋」 ・史料「慶安の御触れ書き」 ・実物「製茶道具」 ・写真「飲茶風景」 ・ワークシート ・資料「気候統計表」など

	・新疆ウイグルの茶の文化	①ビタミンの補給源として ②一部のイスラム教徒の習慣として ③茶を他地域から移入する必要性について ○「茶馬交易」という言葉を通して、遊牧民が茶をいかに重要なものと考えていたか理解する。	・ビデオ「人間は何を食べてきたか——南方に嘉木あり——」
まとめ	・日本と新疆ウイグルの飲茶の習慣の比較考察	○団茶を試飲し、感想を発表する。 ○日本と新疆ウイグル自治区の飲茶の習慣を比較・考察し、自然環境、社会環境などの特色について整理する。	・実物「団茶」、 「試飲道具」

- (4) 評価の観点 ①日本と新疆ウイグル自治区の飲茶の習慣の比較を通して、それぞれの地域文化の一般的共通性と地方的特殊性について理解できたか。②地域文化の形成に対する自然環境、社会環境の影響について理解できたか。
- (5) 指導上の留意点 ①VTRは、必要に応じ無音声画像や静止画像にし、内容を十分考察させるよう配慮する。②史料、統計などの資料は精選して提示するとともに、ゆっくり読み取らせるよう配慮する。

3. 豊臣秀吉の朝鮮出兵とやきもの

- (1) 教材として取り上げた理由 茶わんや皿などのやきものは、私たちの生活の中で欠かすことのできないものである。やきものは、古代の土器に始まり現代の陶磁器に至るまで、朝鮮半島や中国の技術を取り入れるなど、幾度かの技術の改良を経ながら、日本人の間で使われ続けてきたものである。そこで、身近な素材であるやきものを事例として、17世紀以降に普及した陶磁器の技術と豊臣秀吉の朝鮮出兵の関係に着目させ、日本と朝鮮半島とのかかわり合いについて理解させることを通して、日本文化の国際性や日本文化の基層における重層性についての認識を深めさせることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時は5時間構成の第4時限にあたる。第1時限では「ヨーロッパ文化との接触」、第2時限では「織豊政権の統一事業」、第3時限では「豊臣秀吉の内政と対外政策」、第5時限では「桃山文化」を学習する。本時では、やきものを通して、朝鮮出兵によって朝鮮文化がどのように日本に取り入れられ、発展していったかを考察させる。学習指導要領では、「日本史A」の「(2)幕藩体制の形成と推移」の「アヨーロッパ文化との接触と鎖国」、 「日本史B」の「(4)幕藩体制の推移と文化の動向」の「ア ヨーロッパ文化との接触と織豊政権」で扱う。

(3) 展 開 例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導入	・秀吉の朝鮮出兵の概略	○朝鮮出兵の意図、経過および侵略の実態について確認する。	・資料「耳塚・鼻塚」

展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮半島からの陶磁器技術の伝来 	<p>○17世紀以降に日本で普及した陶磁器の技術は、秀吉の朝鮮出兵により日本に連れて来られた朝鮮半島の陶工たちから伝えられたものであったことを理解する。</p> <p>①17世紀以降に陶磁器の生産が盛んとなった地</p> <p>②薩摩焼・有田焼・萩焼などの成立と朝鮮半島から来日した陶工の生活</p> <p>③諸大名が朝鮮半島の陶工を連れてきた背景</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート配付 ・地図「日本各地の窯場」 ・写真(実物)「近世初期の陶磁器」
	<ul style="list-style-type: none"> ・日本のやきものと朝鮮半島 ・江戸時代の陶磁器の発展 ・朝鮮出兵に伴う文化の伝来 ・朝鮮出兵と唐辛子 	<p>○日本のやきものと朝鮮半島とのかかわり合いを、古代までさかのぼり理解する。</p> <p>①須恵器の伝来とその普及について</p> <p>②やきものの呼称(茶わん・徳利・丼など)に朝鮮語が残っていること</p> <p>○江戸時代には各地で陶磁器づくりが発展し、日本人の生活の中に浸透していくとともに、有田で焼かれた柿右衛門式の色絵磁器が、その芸術性の高さから、ヨーロッパでも大変珍重されたことを知る。</p> <p>○朝鮮出兵の際、陶工ばかりでなく多くの技術者や学者などが捕虜として連れて来られ、彼らによって朝鮮文化が日本に伝えられたことを理解する。</p> <p>○朝鮮出兵をきっかけに唐辛子が日本から朝鮮半島に伝えられ、食生活が変化したことを知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート「やきものの歴史」 ・写真「須恵器」 ・資料「登り窯の絵」 ・写真(実物)「有田の色絵磁器」 ・ワークシート「朝鮮文化の伝来」 ・写真(実物)「唐辛子」、「キムチ」
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮出兵による文化交流 ・日本の文化受容 	<p>○朝鮮出兵によって、陶磁器をはじめ朝鮮文化が日本に取り入れられたが、それは略奪という極めて異常な形で文化交流であったことを認識する。</p> <p>○日本のやきものが、外来技術を摂取しながら、日本社会の中で発展してきたことを考察する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート「文化理解について」

(4) 評価の観点 ①日本の近世における陶磁器技術の成立が、秀吉の朝鮮出兵に由来したという経緯を理解することができたか。②日本と朝鮮半島の歴史上のかかわりについて正しく認識することができたか。③日本や朝鮮半島の文化に対して興味・関心を深めることができたか。

(5) 指導上の留意点 実物や写真などは、やきものの色や形、厚さや硬さなどの変化の様子が、明瞭にわかるものを使用する。

4. 「なれずし」の伝播と「握りずし」の誕生

(1) 教材として取り上げた理由 「ずし」は天ぷらやすき焼きなどと並んで、日本の食文化

を代表する食べ物である。しかし、「すし」の起源は、東南アジアの水田耕作地帯であり、そこで作られていた「なれずし」が、日本に伝播し、その後、変化して、現在の「握りずし」が生まれた。今日、「握りずし」は、アメリカにおいても食べられている。そこで、身近な素材である「すし」を事例として、様々な自然環境にもとづく食文化の多様性と、異文化の流入による生活・文化の変化について理解を深めさせることをねらいとして、本教材を取り上げた。

(2) 本時のねらい 本時は3時間構成の第2時限である。第1時限では、「モンスーンアジアと米」、第3時限では、「日本の経済発展とアメリカの『すし』」を扱う。本時では、米と水田耕作地帯の漁業が結び付いて「なれずし」が誕生し、それが日本に伝えられ、「握りずし」へと変化していった過程を理解させる。学習指導要領では、「地理A」の「(2)世界の人々の生活・文化と交流」の「ア 自然環境と人間生活」、「イ 諸民族の生活・文化と地域性」で扱う。

(3) 展 開 例

	学習項目	学 習 活 動	備 考
導 入	・「握りずし」の源流	○現在の「握りずし」の源流が琵琶湖周辺の「フナずし」であること、また、「フナずし」が、東南アジアから日本にかけてのアジアモンスーン地域に広がる「なれずし」の一つであることを知る。	・地図「『なれずし』の伝統的分布」 ・写真「フナずし」
展 開	・「なれずし」の誕生 ・「なれずし」の変化 ・「握りずし」の誕生	○「なれずし」はモンスーン気候の雨季の影響によって漁獲が集中する地域において、魚の保存のために考案された発酵食品であることを理解する。 ○「なれずし」が、稲作の伝播とともに、東南アジアから中国を経て日本に伝えられたこと、またその経路について確認する。 ○室町時代、「なれずし」が日本において発酵期間の短い「生なれ」へと変化するとともに、魚の保存のための食品が、年中行事などハレの日の食べ物となっていたことを理解する。 ○「生なれ」は、魚だけではなく米を食べることも主な目的となってきたことに着目する。 ○江戸時代中期には、「生なれ」が「早ずし」に変化し、発酵ではなく酢酸によって酸味を付ける日本独特の「すし」が出来上がったことを理解する。 ○江戸時代後期の江戸における屋台の流行のなかで、「早ずし」が「握りずし」へと変化し、そばや天ぷらと並ぶ代表的な食べ物となったことを理解する。	・資料「『なれずし』の作り方」 ・資料「稲作の伝播」 ・資料「『生なれ』の作り方と押しずし・五目ずし」 ・資料「『早ずし』の作り方と海苔巻き、稲荷ずし」 ・資料「『すし』そば、天ぷらと江戸の屋台」

		○第二次世界大戦以降、冷凍技術や交通機関の発達などにより、江戸前の「握りずし」が全国に広まり、日本を代表する食べ物になったことを理解する。	・資料「『握りずし』の全国への広がり」
まとめ	・日本の文化受容	○稲作とともに伝えられた「なれずし」が、「生なれ」や「早ずし」などの過程を経て「握りずし」へと変化し、日本の食文化を代表する食べ物になったことを考察する。	

- (4) 評価の観点 ①「なれずし」がどのような自然環境の下で発達した食品であるかが理解できたか。②「なれずし」を通して、日本文化の源流が中国や朝鮮ばかりではなく東南アジアにもあることが理解できたか。③「なれずし」から「握りずし」への変化のなかで、日本独特の文化が形成されたことを理解できたか。
- (5) 指導上の留意点 ①「なれずし」の伝播については、地図を活用して空間的に捉えさせるようにする。②写真や資料を活用し、それぞれの時期の「ずし」の変化を具体的に理解させるよう工夫する。

5. 日本における西洋スポーツの受容

- (1) 教材として取り上げた理由 現在、スポーツは、多くの日本人に好まれている余暇の過ごし方の一つとなっている。日本に広まった数多くのスポーツは、19世紀のイギリスに起源をもつ。イギリスで生まれた近代のスポーツは、明治期の日本に伝えられ、学校教育の中で精神や肉体を育成する方法として発達し、日本の精神風土の中で日本独特のスポーツ文化を形成した。しかし、現在のサッカーJリーグの試みは、ヨーロッパに見られる地域密着型のクラブチームを母体とし、サッカーを楽しむ姿勢をもつなど、日本のスポーツ文化に新しい方向を示している。そこで、生徒にとって身近なスポーツを素材として、日本における西洋スポーツの受容の特色とその変化を理解させることを通して、日本の文化受容の特質について考察を深めることをねらいとして、本教材を取り上げた。
- (2) 本時のねらい 本時は、5時間構成の第4時限である。第1時限では「じゃがいもの伝播と生活革命」、第2時限では「コーヒーハウスと市民革命」、第3時限では「産業革命と飲茶の大衆化」、第5時限では「ジャズの誕生とアメリカ型生活様式の成立」を扱う。本時では、現代のスポーツがいつ、どこで、なぜ誕生し、それがどのように日本社会に受け入れられたかを理解させる。学習指導要領では、「世界史B」の「(5)近代と世界の変容」の「ア 市民革命と産業革命」、「世界史A」の「(3)19世紀の世界の形成と展開」の「イ 産業革命と世界市場の形成」で扱う。
- (3) 展 開 例

学習項目	学 習 活 動	備 考
・現在の日本	○高等学校の運動部を手がかりに、現在、日本で取	・ワークシート配

導 入	のスポーツ ・スポーツと 武道	り行われているスポーツの種類を確認する。 ○スポーツという概念は、19世紀にヨーロッパで確立したこと、古来、日本には心身鍛練のための武道があったことを理解する。	付
展 開	・イギリスにおける現代スポーツの誕生 ・日本人と西洋スポーツ	○現在、日本で行われているスポーツの多くが、19世紀の後半、イギリスで誕生したこと知る。 ○経済発展により生じた多くの国民の余暇が、イギリスで多くのスポーツを誕生させたことを理解する。 ○パブリック・スクールから広まったフットボールのクラブチーム組織や、プロ・アマ一体のフットボール協会について理解する。 ○幕末から明治初期の日本において、軍隊、学校、会社などで、西洋スポーツが導入されたことを知る。 ○学校の体育の授業、部活動を通して、西洋の競技スポーツが日本で広まっていったことを知る。 ○修養の手段などとして発達した高校野球を例にして、日本のスポーツ受容の特色に気付かせる。	・ワークシート ・資料「伝統的な民衆娯楽とフットボール」 ・写真「プロ野球」、「Jリーグ」
ま と め	・現代スポーツの誕生と日本のスポーツ受容	○現代スポーツの多くが、19世紀のイギリスで生まれ、その後、日本に導入されたことを通して、文化交流の意義を理解する。 ○クラブチームを母体とするサッカーJリーグの試みは、今までの日本のスポーツ文化の受容とは違うことに気付き、国民の生活意識の変化が、スポーツ文化の受容の仕方を変化させることを認識する。	・ワークシート記入 ・資料「Jリーグとホームタウン」

- (4) 評価の観点 ①現在、日本人が楽しんでいるスポーツの多くが、19世紀後半のイギリスで誕生したことを理解できたか。②19世紀後半のイギリスで、多くのスポーツが誕生した社会的背景を理解できたか。③高校野球とサッカーJリーグを通して、日本の西洋スポーツの受容の変化に気付いたか。
- (5) 指導上の留意点 ①生徒のスポーツについての知識を活用する。②絵や写真などは、生徒にとって身近な内容のものを使用する。